

## ENG アトラス めまい・平衡機能障害診断のために

小松崎 篤 著

近時、世の中は不安定でストレスが多く、生活習慣病も多く、その上高齢者社会になり、めまい・平衡機能障害患者が増えている。これらの患者への対応として、病歴をよく聴いて自覚症状を知ると同時に平衡機能検査を行って他覚的所見を把握し、診断と治療をすることが必要である。検査には体平衡検査と眼運動（眼振）検査がある。前者で平衡障害の特徴を知り、後者で眼振や異常眼運動が出現すれば、それらの所見は病巣局在診断、病状の推移や治療効果判定に貢献することが大きい。

従来、眼球運動異常は肉眼観察が主であったが、他覚的に記録することにより、記録として残るのみではなく定量的な検討を加えることが可能となった。この記録法として電気眼振計（electronystagmography：ENG）がある。

このたび、小松崎篤先生（医科歯科大名誉教授）執筆による本書が出版された。これはまさにめまい・平衡機能障害の臨床に半世紀にわたり従事された著者渾身の力作である。

芸術的ともいえる眼球運動のENG記録700点余が収載されている。

近年、眼にゴーグルを掛け光学眼振計の原理を利用して眼球運動を記録する方法がある。この方法は、電極の接着を必要としないこと、ノイズの少ないことなどの利点があるが、閉眼の記録ができないのが欠点である。前庭性眼振では開眼や暗所開眼で眼振出現が十分でなくても閉眼の状態でも眼振が出現することがあり、これはめまいの他覚的所見として重要であると指摘している（V-3章「非注視下の記録」参照）。

きれいなアーチファクトのない役立つENGを記録

することは大変に苦勞する。「IV. ENG記録の実際」に1～7章にわたって懇切丁寧に述べられているので、まず熟読してそのコツをつかんでほしい。そして自らが診療に当たり電極接着から行い、ENG記録に馴染むことで、眼振や異常眼球運動が示す病態が理解できるようになると思う。

内容の全体を紹介する。「I. ENGの歴史」「II. ENGの原理」「III. ENGの利点と欠点」「IV. ENG記録の実際」「V. 眼振の記録と検査法（自発眼振検査、注視眼振検査、非注視下の記録、視刺激による検査、前庭刺激による検査）」「VI. 各疾患におけるENG記録所見〔末梢前庭障害総論、末梢前庭障害各論（メニエール病と遅発性内リンパ水腫、前庭神経炎、めまいと急性感音難聴、良性発作性頭位めまい症、内耳炎、両側性前庭障害、聴神経腫瘍と小脳橋角部障害）、中枢性疾患（脳幹障害と眼球運動の異常、小脳障害と眼球運動の異常、大脳障害と眼球運動の異常）、先天性眼振〕」の筋立てである。

これらの全編にわたり、長年の多数の明快で美しいENG記録を示して、所見の意味付け、疾患のその背景にある病態が明確に解説され、同時に今後解決すべき問題点も指摘されている。参考文献も多く示されている。その分野の診療に従事する医師、臨床検査技師、看護師などに大いに活用してほしい有用な書である。

岐阜大名誉教授/一宮西病院名誉院長  
宮田英雄

A4・頁448 2017年05月  
定価：本体8,200円＋税  
[ISBN978-4-260-02131-9] 医学書院刊